

山と博物館

第43巻 第3号 1998年3月25日

大町山岳博物館

春をさがしに

小山 秀代



春の女神（ヒメギフ蝶） 撮影 小山 秀代

三月になると、春をさがしにテレマークスキーで家のまわりにある林の中を散歩する。

もうネコヤナギの銀白色の花穂がほんの少しのぞいている。マンサクも花芽が丸く膨らんでいる。川面もぬるんで、空気も春の匂いがする。そして小鳥たちも、「もうすぐ春だよ」とさえずっている。

オリンピックでにぎわった白馬山麓も雪どけとともに花ばなが咲きみだれる。
カタクリ・スマレ・キクザキイチゲ・シヨウジヨウバカマな

と可憐な花が咲いて、春を待ちかねたように「春の女神」とよばれるヒメギフ蝶が花から花へと、美しい姿をみせる。

ギフ蝶・ヒメギフ蝶の保護している方々は、カタクリの咲きぐあいを観察しながらヒメギフ蝶の初羽化を楽しみにしている。ヒメギフ蝶の舞うカタクリの園はまるで天国にいるような素敵な春を分けてあげたい……。

でも、まだここは積雪九〇センチ。辺り一面が銀世界。

（グループ・蝶と野の花代表）

アルプスに翔けた小伝令使(その二)

— 父・三田旭夫の夢と中部山岳鳩協会 —

三田 啓一

三、現存する中部山岳鳩協会

関係資料のあらまし

現在まで親族の手元に残っていた中部山岳鳩協会関係の資料はすべて筆者のもとに集められ、中型の段ボール箱二つに収まっている。重複する資料もすべて一点としてカウントすればその総数は五百点を軽く上回るであろうが、重複を省いた件数でみると総数は二百件に満たないと思われる(但し、公用私用で受信している葉書、書簡類、相当数にのぼる写真はこの数に含めていない)。限られた紙数で現存するこれらの資料の輪郭を紹介するために、次に一覧表を掲げてみることにしよう。

この表は、筆者が独自に設けた六つの主題のもとにすべての資料を分類した上で、各主題分野ごとに代表的な資料を例示してみたものである。

このように整理を進めてみると、まず第一に、資料そのものがすっかり散逸してしまっただという印象を強く受ける。第二次世界大戦をはさんで約六十年間の時の流れがあり、この間に三田旭夫と家族も自宅改築、結婚、転居といった一身上の変動を何度か経験してきたという事情があるにしても、中部山岳鳩協会事業の全体像を資料によって体系的に辿ることができなくなってしまうのははなはだ残念である。しかし、そうではありながらも、現存する資料によって一定の事業のイメージ

表 現存する中部山岳鳩協会関係資料のあらまし

区分	件名	個数	備考	区分	件名	個数	備考
A. 組織、運営	「伝書鳩事業目論見書」	4冊	内1冊に、賛意署名14名分あり	E. 中部山岳鳩協会関係記事	鳩君の救護演習、28日「中部山岳鳩協会」の壮挙	1部	『東京日日』昭和11年6月17日
	中部山岳鳩協会 工事請負契約書	1部	昭和10年10月21日付		豪雨の空にSOS 可憐小鳩の大殊勲	1部	『東京日日』昭和11年6月30日
	中部山岳鳩協会 収入・支出 豫算書		昭和14、16年度		針ノ木遭難の報を伝書鳩もたらず	1部	『時事新報』昭和11年7月16日
	中部山岳鳩協会 収入・支出 精算書		昭和13、14、15年度		驚く飛翔記録、山岳鳩通信、鎗一大時間を廿五分	1部	『信濃毎日』昭和11年7月27日
B. 活動一般	Pigeon Ticket (鳩券)	51枚綴の7冊	鳩貸出用のチケット	F. その他	伝書鳩と山岳通信(上) (三田旭夫記名記事)	1部	『読売』昭和13年2月25日
	JAPA(中部山岳鳩協会) 鳩使用箋	60枚 200枚	通常用(白) 非常時用(ピンク)		遭難機と鳩 (三田旭夫寄稿)	1部	『東京朝日』昭和15年3月11日
	(1)電報頼信複写帖 (2)電報複写簿	各1冊	協会からの発信の控		(1)地図		鳩の帰還訓練用と思われる山岳地図多い
	色紙の寄書	2枚	二條彌基などの名が見える		(2)パンフレット類		昭和10年代のものを中心に10数点
C. 広報映画	「小伝令使」撮影映画会 収支精算書	2部	撮影期間の記入あり	(3)葉書、書簡		中部山岳鳩協会をめぐる通信文がかなりある	
	「山岳遭難防止の夕」開催案内ピラ	12枚	後援、文部省、厚生省とあり	(4)写真		中部山岳鳩協会の活動に関するモノクロ多数	
	“Little Messenger”の紹介とカット毎の説明	1部	A4判、英文タイプ、9頁	(5)三田旭夫自作のシナリオ、原稿		数篇あり	
	「リトル・メッセンジャー」サウンド版、日本語解説	1部	同上邦訳版タイプ、17頁				
D. 鳩の飼育、携帯、訓練	鳩携帯籠(休憩室付)	2	ボール紙製で木綿ネット使用				
	鳩舎内の鳩個室出入口扉部分	1	木製枠で棧はスチール				
	往復鳩訓練計画ノ一例(固定式)	1枚	B4判、謄写印刷				
	移動鳩能力保持訓練計画	1枚	同上				

をつかむことは可能である。それに今後機会があれば新聞記事などを検索、収集して情報も補い、より鮮明な事業の実像に迫ってみるのも我われの課題に加えておきたいと思っている。

次に、表を見ながら主題分野ごとに現存資

料の特徴を眺めてゆくことにしよう。「A 組織、運営」の分野では、本稿に引用した「伝書鳩事業目論見書」が残っているのが最大の収穫といえようか。工事請負契約、予算書、精算書も部分的に見受けられるけれども、事業の財務面からの接近にはかなり限界

があるようである。「B 活動一般」には、中部山岳鳩協会バンフレット、平常時と非常時との通信用箋、通信内容が記してある電報頼信控、二條弼基、貞清玄龜など当時の著名人による寄書といった臨場感あふれる記録が散見される。「C 広報映画(小伝令使)」のもとには、撮影期間を明示した「小伝令使」撮影映画収支精算書、十六ミリ・サイレント・フィルム「リットル・メッセンジャ」サウンド版・日本語解説(敗戦後にGHQに鳩の事業を説明するために作成した英語のトーカーからの日本語訳と推定される)、「山岳遭難防止の夕」(文部省、厚生省の後援で行われた「小伝令使」映写会の案内ポスター)な



「時事新報」の記事(表中の三番目)をはじめ当時の貴重な資料が残っている。ただしこれらの新聞記事のほとんどは、中部山岳鳩協会が発足した昭和十一年の日付のものに限られている。そこで、右にふれたように、それ以降の事業関係記事を新たに検索し収集して事業全体の姿を浮き彫りにしていくことが今後の課題として残されている。なお「E」の資料群のなかには、現存する数少ない三田旭

とが並んでいる。しかし私共家族にとつて大変に残念なのは、肝心要の「小伝令使」の撮影フィルム本体とそのサウンドテープとが行方知れずになっていることである。家族全員で心当たりを捜しているのだが、今のところその所在は完全にわからなくなってしまう。「D 鳩の飼育、携帯、訓練」の項の資料も散逸しまつりのない構成になっているけれども、なかには鳩の休憩室兼用携帯籠や鳩舎内の鳩個室の出入口部分といった興味深い現物の資料も含まれている。「E 中部山岳鳩協会関係記事」には、本稿で引用した

Pigeon Ticket

危険 信

鳩舎 状 況

鳩舎 番号	発行 年月日	時間	分	秒
鳩舎 番号	昭和 年 月 日	時	分	秒
主任	J. A. P. A. 鳩 便			

非常時の通信用箋

「大町市史」は、父・三田旭夫の事業を「山の通信・伝書バト(中部山岳鳩協会)」と題し、ほぼ三頁にわたって記述している(第五巻、九九八頁―一〇〇二頁)。中部山岳鳩協会の事業は、日本の第二次世界大戦への参戦が長期化するなかで中止の止むなきに至り、その後再開されることもなかった。しかし大きな文明の波のウネリ、特に戦後の日本の通信技術を含めた目ざましい科学技術文明の発達を思うとき、この事業はいずれは時の流れの彼方に置き忘れられる運命にあったのは間違いないであろう。その意味で、二十

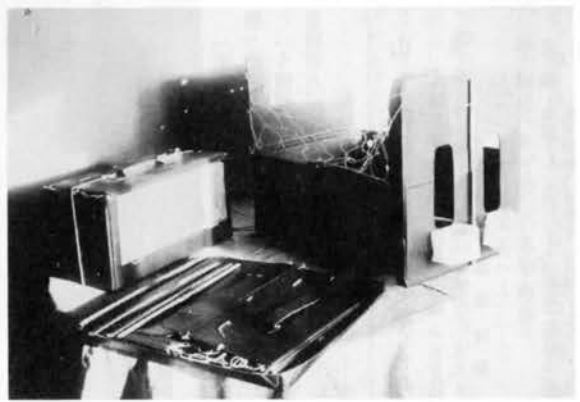
関して受信している葉書と書簡類は、協会の当時の動きを生き活きと今に伝えている。建築中の協会の建物、軍用鳩の私下げを受ける風景などが写し込まれたモノクロ写真、鳩の帰還訓練用に用いたと思われる書き入れの多い山岳地帯の大型地形図なども、やはり往事を偲ばせる貴重な資料である。

夫の記名記事が二点含まれているのにも注目しておきたい。「F その他」に集めた資料類は雑多な素顔を見せているが、たとえば中部山岳鳩協会の活動に

代後半から三十代前半にかけての青年・三田旭夫が人命救助という熱い使命感にかられて企画し、立ち上げ、力の限りに展開した伝書鳩による山岳遭難救助活動は、個人的なひとり人間がひとつの時代の存在拘束のなかで試みたユニークな文化活動として、このように地元の記録にひっそりと止められるのが最もふさわしいといえるのかもしれない。

このたび、大町市立山岳博物館のご理解とご協力を得て、本稿でその一部を紹介した現存する中部山岳鳩協会関係資料を同館に寄贈し、収蔵していただく運びとなった。自らが深く愛し活動の拠点にした「北アルプス一番街」の大町市に自分の事業活動に関する資料が永く保存されるということになれば、父にとつてこれに勝るよるこびはないであろうと思う。

おわりに



鳩の休憩室兼用携帯籠の三態
①折畳んだ状態(手前) ②ハト携帯時(左) ③休憩室に利用(右)

(東京都在住)

お知らせ

大町山岳博物館の平成一〇年度のおもな企画展、特別展および催し物は次のとおりです。

増村征夫写真展 星の降る里(有料)
《期間》 四月二日(日)ー五月一七日(日)
《会場》 山岳博物館一階ホール 特別展示室



撮影 増村 征夫

花の写真家としても知られる増村さんは、誰も気にとめない足もとにも目をこらさず。霜のおりた一枚の枯れ葉さえ、増村さんに会えば無限の宇宙の象徴となってしまう。
 星も山も木も草も、どれがいちばんというわけではなく、すべてがつながりあった自然であり、写真に表現する増村さんもまた、確実にその内にあるのだろう。

人は自然の一部……。こんな当然のことを忘れがちな私たちは、作品たちの調和に身をゆだね、心開くとき、きつと忘れかけていた大切なものを思い出す。

なお、会期中の毎日曜日(三時から四時)と五月五日(子ども向けに随時)は、作者によるスライドをまじえたギャラリートークを教室にて開催します。

動物写生大会(無料)

《会期》五月九日(日)

雨天の場合は一〇日(日)

《会場》山岳博物館付属園

付属園で飼育しているカモシカやシベリアオオヤマネコをはじめ、動植物を被写体に写生大会をおこないます。

対象は、幼稚園・保育園児、小・中学生です。なお、選定された作品は第四三回中部ブロック動物園水族館写生コンクールに出品されます。

小鳥の声を聞く会(会費制)

《期間》五月九日(日)ー五月一〇日(日)

《会場》長野県山岳総合センター・鷹狩山 恒例となりま

した「小鳥の声を聞く会(山岳博物館友の会共催)」を、長野県山岳総合センターをお借りして、開催します。

昨年は、昼は小鳥の塗り絵や剝製による解説、夜はスライドを用いた鳥のお話を聞きました。

翌朝は、博物館の裏山、鷹狩山山頂に向かい、サンコウチョウやオオルリ、サンショウウカイなど、三五種の鳥の飛翔やさえずりを観察しました。

北アルプスの風のにせてー 中川珠世

切り絵展(無料)

《期間》五月二三日(日)ー六月二日(日)

《会場》山岳博物館 教室

切り絵という世界を通して、高山植物の美しさ、母ライチョウの温もりとヒナたちの愛



小鳥の剝製を使った勉強会

らしいしぐさをお楽しみください。

動物写生画展(無料)

《会期》七月五日(日)ー七月二日(日)

《会場》山岳博物館 講堂

五月九日(日)に山岳博物館付属園においておこなった写生大会の作品を一堂に展示します。なお、第四三回中部ブロック動物園水族館写生コンクールに入賞した作品には、盾と賞状を授与します。

日本山岳画協会展(有料)

《期間》七月一八日(日)ー八月三〇日(日)

《会場》山岳博物館一階ホール 教室 講堂 特別展示室

日本山岳画協会は、好んで山を描く画家の集団として、昭和一年に創立しました。山岳博物館では昭和五九年、平成元年、平成六年につき四回目となります。一四名の会員の傑作を集結させての展示です。

キノコ展(無料)

《期間》九月二三日(水曜)ー九月二七日(日)

《会場》山岳博物館 講堂

昨年に引き続き大町周辺の山麓から河川まで、その年のあらゆるキノコを集め、展示・解説します。また、恒例となりましたキノコ学習会(二三日、山岳博物館友の会共催)と鑑定会(二七日)も予定しています。



キノコ学習会

林藪山人一美 安曇野風物画展(有料)

《期間》一〇月一八日(日)ー十一月三日(日)

《会場》山岳博物館一階ホール 教室 特別展示室

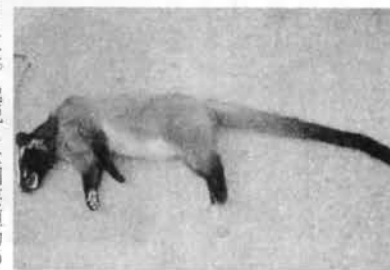
大町市在住の画家林一美さんによる安曇野の風景・風物を描いた油絵、彩墨画を展示します。

情報・資料をお寄せください

山岳博物館では大町周辺に帰化している動物・昆虫・植物の情報・資料を収集しています。交通網の発達やペットの需要に伴い、帰化する動物も多様化しています。

昨年は、ベットのフェレットやハクビシンといった動物が郊外や隣村で捕獲、目撃され、植物ではモイロツメクサ(マメ科)が新たに確認されました。逸脱した園芸植物の一时的な帰化も見られます。

「家の周りや山道などで見かけた、写真を撮った」「過去にこのような記載がある」という情報や資料がありましたらお寄せください。(動物担当：清水 植物担当：千葉)



交通事故に遭ったハクビシン

山と博物館第43巻第3号

発行 一九九八年三月二十五日発行
 〒388長野県大町市大字大町八〇五六一
 大町山岳博物館
 TEL〇二六-一三三二〇二二
 印刷 大糸タイムス印刷部
 定価 年額一、五〇〇円(送料共)(切手不可)
 郵便振替口座番号〇〇五四〇七三三三三